

俗ラテン語における受動表現形式

Les expressions du passif dans le latin vulgaire

矢 島 猷 三

Yuzo YAJIMA

古典ラテン語において受動の概念は、まず何よりも受動態の活用形によって表現される。たとえば動詞 *claudio* の直説法の活用は次のごとくである。

(現 在)	(完 了)
<i>claudor</i>	<i>clausum sum</i>
<i>clauderis</i>	" <i>es</i>
<i>clauditur</i>	" <i>est</i>
<i>claudimur</i>	<i>clausa sumus</i>
<i>claudimini</i>	" <i>estis</i>
<i>clauduntur</i>	" <i>sunt</i>

(未完了過去)	(過去完了)
<i>claudebar</i>	<i>clausum eram</i>
<i>claudebaris</i>	" <i>eras</i>
⋮	⋮
⋮	⋮

(未 来)	(未来完了)
<i>claudar</i>	<i>clausum ero</i>
<i>clauderis</i>	" <i>eris</i>
⋮	⋮
⋮	⋮

即ち、現在系列のテンスでは受動の人称語尾 (-r, -ris, -tur 以下)を加えるいわゆる総合的タイプとなるのに対して、完了系列のテンスでは助動詞*sum*の活用形と完了分詞を組み合わせたいわゆる分析的・迂言的タイプとなる。総合と分析という二つの異なる原理を併せ持つこの受動表現形式は、その不均衡性を内包しつつも古典ラテンの時期を通してそのまま用いられ続けた。今この段階をテンスとアスペクトの観点から整理すれば次表のようになる。

Aspect \ Temps	Passé	Présent	Futur
Imperfectif	claudebatur	clauditur	claudetur
Ponctuel	clausum est		
Perfectif	clausum erat	clausum est	clausum erit

ところでこの表によって明らかのように、clausum est という同じ一つの形が二つのものを表わしうることになる。瞬時相としての過去（閉じられた）と完了相としての現在（閉じられている）である。完了分詞に伴って助動詞的に用いられたsumは、sum + pp という syntagme の全体が動詞であることを示し、またそれゆえに人称・数の区別を表わすものではあっても、元来テンスを示すものではなかった。しかし、この二重性と曖昧さのために、俗語で clausum est と magnum est の est が共に同じものを示すと取られるようになって不思議ではない。これには clausum habet のような能動態の迂言形の影響もあったのであろう。とにかくここから clauditur と clausum est の混同が生じ、結果として分析タイプの clausum est が総合タイプの clauditur を押しよけることになる。sum をテンスの指標と見なすところから連動的に生じた一連の変化の結果は次のごとくである。

Aspect \ Temps	Passé	Présent	Futur
Imperfectif	clausum erat	clausum est	clausum erit
Ponctuel	clausum fuit		
Perfectif	clausum fuerat	clausum fuit	clausum fuerit

文献上この種の実例を探すのはさほど困難ではない : Cyrene autem condita fuit ab Aristaeo (Just. 13, 7, 1); proelia quae... fuerant concitata (Jord. Get. 186); tantus rugitus est ut forsitan porro ad civitatem gemitus populi omnis auditus sit (Peregr. 36, 3); quod si fecerit et hoc confessus fuerit (Lex Salica IX, I). なお助動詞sumの代りにvenioを用いた例もあり: si jumentum de via coactum veniet (Mulom. 158), これはのちにイタリア、レティアで用いられる形を暗示するものである。

その後のロマンス諸語の形を考えるとさらにもう一段階先の形を理論上想定することも可能である。それは能動の完了 clausit が分析形の clausum habet に置き換わっていった変化に呼応するもので、次の

ように二重に迂言形を重ねたものである: *clausum fuit* > * *clausum statum habet* (= *il a été fermé*), *clausum fuerat* > * *clausum statum habebat* (= *il avait été fermé*). しかしこのタイプのロマンス語形が文献に現われるのはかなり後になってからなので(フランス語は14世紀)、この推定形がラテン語的な外形をまもっていた時代から使われていたかどうかは大いに疑問である。これは、*inf + habere* という迂言形を基にした未来形 *clausum erit* > * *clausum essere habet* (= *il sera fermé*), *clausum fuerit* > * *clausum statum habere habet* (= *il aura été fermé*) についても同様である。

総合的な受動形が失われる一方で、本来受動の語尾しか持ちえない一群の動詞 *deponentia* も次第に形を能動形に順応せしめる。形式所相動詞の消失によって *hortari*, *luctari*, *nasci* は *hortare*, *luctare*, *nascere* となるが、*communicare*, *medicare*, *nutricare* に対する *communicari*, *medicari*, *nutricari* のような過剰訂正形も現われる。このことは不定法のみでなく活用形においてもそうである。

俗ラテン語において受動の概念は上記の形だけでなく、再帰構文においても表現された。元来ラテン語の受動形は、起源との関わりで二種類のもの(受動態と中動態)を表現することができた。したがって *lavari*, *cingi*, *ornari* の如き受動形は、一方で(人に)「洗ってもらう」、「帯を締めてもらう」「飾ってもらう」という受動態を示すと同時に、他方で「自分を洗う」、「自分で帯を締める」、「自分で飾る」という再帰的意味(中動態)を示すことができた。後者の中動態の部分は *se lavare*, *se cingere*, *se ornare* のように再帰代名詞による表現も可能であったために、中動的受動概念はこの様式で表わされるようになる: *Myrina quae Sebastopolim se vocat* (Plin. Nat. 5, 121); *mala rotunda . . . toto anno servare se possunt* (Pall. 3, 25, 18). この場合は行為が主語に戻るために主語以外の行為者 (*ab alquo*, *alqa re*) が示されることはない。

最後に、主語が不特定な場合の受動概念の表現様式がある。ラテン語は自動詞の三人称単数の受動形を用いて非人称を表わすことができたが (*pugnatur*)、これは他動詞についても可能であり、また能動の三人称複数も同様の概念を表わしえた (*dicunt*)。俗語ではこの能動形が、*litteras scribunt* のように主語を特定しない(または非人称的な)場合の受動概念を示すのに用いられている。またこれと類似の *ubi homo desiderium suum compleri videt* (Peregr. 13, 1) のごとき例は、のちに北ガリアで好まれた *on* …の表現に通じるものであろう。

Bibliographie

- V. Väänänen, Introduction au latin vulgaire, Klincksieck, 3^e éd., 1981.
- E. Bourciez, Eléments de linguistique romane, Klincksieck, 5^e éd., 1967.
- P. Monteil, Eléments de phonétique et de morphologie du latin, Nathan, 1973.
- F. Kerlouégan, D. Conso, P. Bouet, Initiation au système de la langue latine, Nathan, 1975.
- M. Harris, The Evolution of French Syntax, Longman, 1978.